令和３年度　国東市：大分県学力定着状況調査結果分析（中学校：国語）

１　結果のポイント

・全体の平均正答率は国東市 74.4%で県 73.5%に対して 0.9 ポイント上回っている。
・「知識」「活用」ともに偏差値は５０を上回っている。
・「領域」「観点」別では、全ての項目で目標値を上回っている。
　特に「領域」別では、「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」、「観点」別では、「書く能力」「言語についての知識・理解・技能」が偏差値５０をこえている。
・全問題 31 問中、無解答問題数は県平均より８割下回っており、解答への意欲がうかがえる。

２　課題が見られた問題と指導の改善事項

（１）伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（2（１）①～③、2（２）②③）

①出題のねらい
　・（１）第１学年までに学習した漢字を読むことができる。
　・（２）小学校で学習した漢字を書くことができる。

②問題内容
　・（１）漢字を読む
　・（２）漢字を書く

③解答状況
　・（１）①「歓喜」【市 74.2%　　県 79.7%　　目標値 75.0%】
　　②「有益」【市 80.2%　　県 82.8%　　目標値 80.0%】
　　③「薄い」【市 97.8%　　県 98.6%　　目標値 90.0%】
　・（２）②「ゆしゅつ」【市 77.5%　　県 79.0%　　目標値 65.0%】
　　③「貸（す）」　【市 54.4%　　県 58.0%　　目標値 50.0%】

④指導の改善事項
　漢字の読みについては、小学校学習指導要領第２章第１節国語の学年別漢字配当表に示されている漢字 1,026 字に加え、中学校修了までに学年別漢字配当表以外の常用漢字の大体を読む必要がある。漢字一字一字の音訓を理解し、語句として、話や文章の中において文脈に即して意味や用法を理解しながら読むことが求められる。そのため、教科書を読むことや読書を通して、漢字の読みの習熟と応用を図るように指導することが引き続き大切である。このことが書くことにもつながっていくと考えられる。
　指導に当たっては、平成 21 年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語 A8一に係る授業アイディア例「定着しにくい漢字や間違いやすい漢字について、意識をもって読み書きできるようにする。」、「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表演力等の育成に向けて～【中学校版】」国語－10「これで納得！私たちが身に付けるべき常用漢字」、平成 25 年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語 B3三「漢字の特徴を捉えて、自分の考えを具体的に書くことができるかどうかをみる。」も参考になる。
（参照）
　「平成 21 年度【中学校】報告書」P．195
　「４年間のまとめ【中学校編】」P．111
　「言語活動事例集【中学校版】」P．37～P．38

（２）書くこと（6（２））

①出題のねらい
　伝えたい事実や事柄について根拠を明確にして書くことができる。【思考力・判断力】

②問題内容

食品ロスについてレポートを書く

③解答状況

【市：46.7%　　県：48.7%　　目標値：45.0%】

④指導の改善事項

学習指導要領では、全学年を通して、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することをねらい、第１学年では特に、根拠を明確にすることが求められている。

根拠を明確にするためには、まず、自分の考えが確かな事実や事柄に基づいたものであるかを確かめることが必要である。その上で、自分の思いや考えを繰り返すだけではなく、根拠を文章の中に記述する必要があることを理解して書くことが重要である。その際、例えば、根拠となる複数の事例や専門的な立場からの知見を引用するなどが考えられる。

２年生〔B 書くこと〕の児童自校ウについて、以下の内容に留意して指導の充実を図ること。

・〔知識及び技能〕（２）イ「情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うこと」の学習との関連を図ること。

・資料の中にある情報が、自分の伝えたいことの根拠としてふさわしいかどうかを検討する場面を設定するとともに、書いた文章を互いに読み合い交流する活動を通して、根拠を明確にして書く力を身に付けること。

「意見文の下書きを読み返したあと、新たに得た情報をもとに文章を書き加える指導」の具体例としては、第１時で、意見文のテーマに沿って自分が読み手に伝えたいことを決め、伝えたいことにふさわしい根拠について考える。第２・３時では、資料にある情報が、それぞれの伝えたいことの根拠としてふさわしいかどうかについてグループで助言し合う。次に、助言を踏まえ、意見文の下書きをノートに書く。その上で、意見文の下書きを観点に沿って読み合い、良い点や改善点について交流する。この活動を受けて、第４時では、交流した内容を踏まえ、各自で意見文を完成させる。

ここで重要となるのは、第３時での読み合う観点である。ここで想定される観点としては、「伝えたいことにふさわしい根拠が示されているか。」や、「資料の中から取り出した情報が正確に書かれているか。」などである。授業のねらいに即した観点の設定が指導のポイントとなる。

（参照）

平成 31（令和元）年度「授業アイディア例」P. 3・4

平成 31（令和元）年度全国学力・学習状況調査中学校国語 3

（【意見文の下書き】を読み返したあと、新たに得た情報をもとに文章を書き加える問題）

３　指導の改善のポイント

（１）これからの国語科の授業づくりの基本的な考え方

①主体的・対話的で深い学びを促すために、以下の８点について留意し、単元構想と授業実践を行うことが大切である。

ア　生徒が興味をもつ教材・題材	イ　魅力的な課題の提示、生徒による課題の発見
ウ　学習の見通し、本時の目標（めあて）の明示	エ　課題解決的な学習、既習事項を活用する学習
オ　自分の考えを発表・交流する機会	カ「できた」「わかった」の実感
キ「できたこと」「わかったこと」の振り返り	ク　日常生活、社会生活への広がり

②国語科は、生徒に付けたい力を付けるために、言語活動を単元全体で取り扱い、言語活動を通して指導事項を指導する教科である。学習指導要領改訂後も、国語科で育成した言語能力は、他教科の基幹になることは言うまでもなく、今後とも更なる言語活動の充実を図り、授業改善を推進していくという方針は不変である。

（２）国語科授業改善の方向性

学習指導要領を鑑み、これまでの国語科の授業を振り返った上で国語科の授業改善の方向性を以下に示す。（具体的留意点）

①適切な言語活動の設定とその充実

ア）付けたい力を付けるのにふさわしい言語活動であるか

・単元を構想する際には、付けたい力と言語活動との領域のミスマッチはないか、よく吟味する必要がある。そして、主たる学習活動の設定時間数は十分であるかも併せて考えておきたい。

・言語活動を設定した後、課題解決のための手法は適切であるかを考えていく。場合によっては、生徒の学習状況（付けたい力が付いているのか等）を把握しながら、弾力的に修正していくことも大切である。

イ）多様な図書資料等が有効に活用されているか

・目的に応じた言語の能力を身に付けさせるために、国語科の教科書だけでなく、多様な図書資料等（書籍、新聞、その他のメディアからの情報）を用いることが必要である。多様な図書資料等を活用する中で、例えば必要な情報を素早く見付ける読みや、必要な部分を詳細に分析する読みの指導が可能となる。また、自分の考えを深めたり広げたりするためにも学校図書館等を利活用し、多様な情報を関連づけて読むことの指導にあたることが必要である。

・そのためにも、「不読者」を少なくする取組が必要である。１ヶ月に５冊以上本を読む生徒の割合は概ね県平均より高い反面、１冊も読まない生徒の割合は県平均を上回っている。まとまった量の文章を素早く読むことが苦手な生徒の学力を育成する基盤として、本に慣れ親しませることが求められる。また、読書によって豊かな語彙形成につながったり、自分を高めたりできるという視点からも、引き続き読書指導の在り方を見直す必要がある。

質問紙：「あなたはこの１ヶ月の間に本を何冊くらい読みましたか。」（単位は％）

冊数	0	1～2	3～4	5～6	7～8	9～10	11～20	21～30	31 冊以上	その他
大分県	16.1	38.1	19.1	9.3	4.1	4.9	4.1	1.8	2.3	0.2
国東市	18.7	36.3	14.8	12.1	4.9	4.9	3.3	3.8	1.1	0.0

ウ）既習事項（または知識・技能）を活用する言語活動であるか

エ）ウ）のために知識・技能の確実な定着を図っているか

オ）生徒の興味関心を喚起する言語活動であるか

・興味関心を喚起する言語活動を行えば、国語科の学習が「好き」という気持ちが強くなり、学びに向かう力につながる。

カ）発表や交流活動を設定した言語活動であるか

・本当に話し合いが必要なのか、必要であれば、どのような形式の話し合いが適切であるのかを吟味した上で行うことが大切である。また、ペア学習やグループ学習のみに終わらないために、生徒自身に気付かせることと教師が教えるべきことの整理をしておく必要がある。

・話し合う手段をとる際には、「何のために」「何の力を高めるために」行うのかということを、生徒自身にも自覚させるように心がけたい。

②生徒の主体的な学びを促す「めあて」等の設定、指導に生かせる「より具体的な評価規準」の設定

ア）適切な「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定があるか

・以下の資料を参考にして、設定すること。

「児童生徒の主体的な学びを促す『めあて』『課題』『まとめ』『振り返り』の設定例」

「主体的・対話的で深い学びを実現するための単元（題材、主題）計画　例」　（県教委 HP）

イ）指導事項・指導領域・評価の焦点化が見られるか

ウ）単元・指導過程・本時の評価規準に整合性があるか

・単元の評価規準→指導過程の評価規準→本時の評価規準という道筋で、整合性をもったより具体的な評価規準（概ね満足できる状況）を設定することが求められる。見取りができにくい評価規準は、指導・支援が曖昧になってしまうと考えられる。

エ)「B　概ね満足できる」状況が具体的に想定され、それを判断する場面や方法は具体的で適切であるか

・評価の場面は１時間で１、２箇所が妥当である。

オ)「C　努力を要する状況」の生徒への指導や支援は行われているか、またその方法（手段）は有効であるか

・具体的な評価規準から本時のめあてを設定すること、また、評価規準に基づき「C　努力を要する状況」の生徒を見極め、「B　概ね満足できる状況」になるよう効果的な支援を行うことが必要である。

③参考資料を活用した授業実践

〇全国学力・学習状況調査の調査問題

〇「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例　http://www.nier.go.jp/jugyourei/

〇中学校国語科指導資料（県教委作成）

〇「個に応じた指導の手引き　中学校　国語科編」（県教委作成）

〇公立高等学校入学者選抜学力調査

（３）その他、国語科授業で取り組むべきこと

①学習用語の確実な理解

・必要な言葉を使用し、言葉で思考を深めることが必要である。そのために、中学校で使用する教科書に掲載されている学習用語は、その学年で確実に理解させることが大切である。既習の用語は授業で使わせ、指導者が曖昧な言葉を使わないようにしなければならない。

②記述する活動の充実

・記述は、「書くこと」の指導だけでなく、３領域の力を向上させるのに有効である。

例（話す・聞く）インタビュー等の取材メモ、スピーチ原稿等
（書く）鑑賞文、図表などを用いた説明・記録、案内、意見文、批評文
（読む）文章を読んで解釈し、自分の考え（感想や意見、評価、批評等）を明確に書くこと。
目的に応じて本文を引用したり要約したりすること。

・また、条件に即応して記述しなければならない場面を設定することも有効である。時間・字数・文章の形態や種類・文体・テーマ・対象・使用語彙・要約・引用・例示・技法・構成等、条件を踏まえる必然性のある課題を設定していきたい。

（４）学校全体で取り組むべきこと

①漢字や語句、文法、表現技法等の習得

・漢字や語句、文法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。特に漢字は一度覚えても使わなければ忘れてしまう。繰り返し学習できる環境を学校全体で整えることが大切である。

②全校一斉読書や各教科における学校図書館の活用

・様々な力を下支えするものとして、活字に親しむことが必要である。その際、文学的文章だけでなく科学的な読み物等にも手を伸ばすように指導する必要がある。

・学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を利活用することも求められる。そのために、国語科だけでなく各教科や領域において、図書館活用の推進をしなければならない。